

小學禮儀

廣島師範學校編輯

全

特35

600

012047-000-0

特35-600

小学礼儀

広島師範学校/編

M17

AAG-0102









明治十七年五月廿日贈付

書物 35 600

書物 35 600

其の縁なり

成制中ありは之を縁と云ふ

は其の縁に達するに及ぶるを

縁に及ぶるに縁は人習ふ世の

縁に及ぶるに縁は人習ふ世の

物に及ぶるに縁は人習ふ世の

物に及ぶるに縁は人習ふ世の

類修身  
冊一  
函一  
行五  
級八  
東京府立博物館

一



偏伸に習ふに己身は皆程像の由  
打ふ安甘な態度は種に遺憾は  
風勃然と多身に驚愕を交の  
杖洒然とて地を拂はしめ世道  
人ふ亦神補はるる小少とて是  
哉此頃未だ友を待て本校のりて

標する所の者も終極に編して一  
巻と為し一節一節小學程像とて不  
其如く披き難く必し年物とて男如く  
女如く或はに由る程像とて  
習せしめ以て世教は一時に併に  
せしるる程に語る事教を



簿に由る

明治十六年七月

水出貞撰



小學禮儀

例言

一本書ハ本校和禮教師深瀬氏の日々教授せられし所を謄記せしものに志し専吉良氏の流派なりと雖現今の世態に應じ稍斟酌せしもの無しとせど且日用適切を主とせざるを以て高尚に馳せ鄭重に過ぐるものハ舍きて録せざ

一本書に進むと坐するにハ左脚を先に退くと起つにハ之を後にせざるを法とせし雖亦之に拘泥すべからず乃座席の廣狹坐客の位置に因り



之に反するも妨げなく其他膝行旋回等も亦之に準ぐ凡そ活用を主として取捨斟酌して矛盾なからむるを要す

一膝行ハ凡て貴人に對して用ゐるの作法なれハ文中膝行云々とあるものと同輩以下へハ用ゐるに及ばず

一左右と云ふハ吾所作に属するものハ吾左右にして物の位置に係るものハ吾に對するものより云ふなり但吾眼下に置くものハ吾左右なりと知るべし

小學禮儀

坐作の部

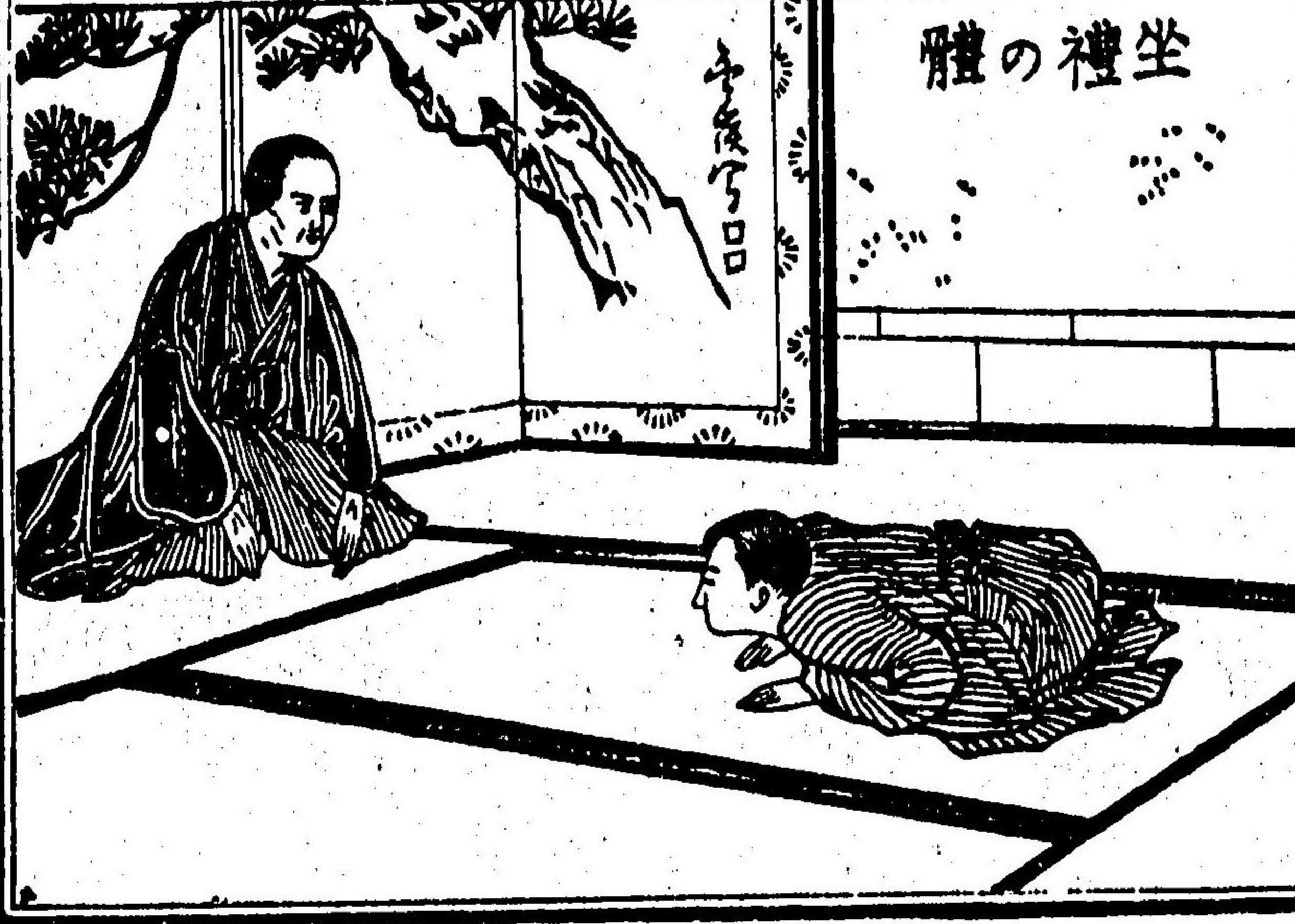
廣島師範學校 編輯

坐禮

眞行草の三精あり眞の禮ハ膝頭を少し開き兩肘を股に着け兩手相距る凡三寸其爪先を向にして座に着け上座を伺ひ徐に身を屈め頭を低れ頭を座に接し腰を低く背を平にして拜すべし行の禮ハ身を前の如く頭を低るゝと座上七八寸許に至るべし草の禮ハ



両手の指先を座に着け  
 頭を低るゝと座上九一  
 尺二三寸にして禮を  
 なり眞の禮ハ上輩行ハ  
 同輩草ハ下輩に對して  
 用おるものなれも此中  
 にも亦各眞行草あれば  
 時宜によりて斟酌之重  
 きに過ぐるも輕からざ  
 るを要す



立禮

両足を揃へ腰を屈めて両手を膝の上に加へ  
 目を貴人の胸間に注いで拜むべし若椅子に  
 在る時ハ椅子を離れ其傍に起ちて前の如く  
 に拜むるなり

着座する様

両手を膝の上に加へ先左の膝より屈め右ハ  
 之に隨ひ漸両膝を揃へて跪き腰を居る時  
 に左を上にして両足の拇指を重子坐して後  
 両手を股の上に置くべし但貴人に對して後



する時ハ両手を左右の脇に添へて座に着く  
るを要す

起立する様  
両手を股の上に置き先両足を爪立て、腰を  
起し右の膝を少し上げ軀を起すに随ひ左の

足を揃へて立つべし

歩負様  
両手を伸して股の上に加へ臂を張らざり又縮  
めど肩を平に、腰を屈めど胸を出さざり踵を  
地に附けて徐々に歩むべし座上进行す時敷

居疊の縁等を踏むべからず

中坐する様

敷居を距る九一二尺の  
前に跪き物を持たざる  
時ハ両手を座に着け一  
禮して起ち左の足より  
敷居を越えて進むべし  
中坐ハ貴人に進見する  
の作法なれども給仕等に

ハ學禮儀



中坐  
の  
體



て屢周旋進退するにハ第一次の外中坐する  
を要せむ

膝行する儀

先跪き物を持たざる時ハ両手を座に着け眞  
ハ三膝半行ハ二膝半草ハ一膝半手と膝と相  
應ふて膝行し其進むにハ左退くにハ右の膝  
を先にさべし但膝行ハ貴人の前に進退する

の作法なり

起ち還り儀

物を持たざる時ハ両手を座に着け両足を丸

立てし腰を起し上座の膝より却退し両手を  
股に置き腰を居る下座の膝を少し上げ旋回  
して起ち還るべし但膝を引く時多きに過ぐ  
るハ躰裁宜しからぬ

拜謁する儀

両手を股に加へ躰を少し屈めて進み眞の禮

客の前を過ぐる儀

に下座の足より起ち少し腰を屈め小足にて  
貴客の前を過ぐる時ハ先敷居の外に跪き徐



速過ぐべし若同輩の前  
ならバ少く身を屈め上  
座の手掌を上げ反く他手  
を股に加へて過ぐべし

建具の開閉  
建具を開くにハ先其前  
に跪き適宜の処に坐し  
障子ハ座上凡四五寸の  
処を両手にて持ち襖ハ  
腰を起し片手を座に着



建具を開閉する體

け片手を引手に掛け先一二寸許開き次に片  
手又ハ両手にて適宜に開き起ちて敷居を越  
えて入るべし之を閉づるにハ容に背かぢし  
て廻り前の如くに坐し先両手にて一二寸許  
引き出し次に片手を座に着け片手にて閉ぢ  
盡すべし

途上の禮

上輩ならバ凡二三間の前にて左に偏りて向  
を替へ両足を揃へて立ち腰を屈め両手を股  
に加へ貴人の吾前を過ぐる時之を伺ひ両手



を膝頭に下けて拜し終  
 りて左足より進みて過  
 ぐべし若同輩ならバ  
 六七尺の前にて互に左  
 に偏り斜に相對し兩足  
 を揃へて立ち兩手を膝  
 に加へて相伺ひ一礼し  
 て同時に進み下輩へハ  
 唯兩手を揃へ腰を少し  
 屈め一礼して過ぐべし



途上互に乗車の時ハ上輩へハ車を止め兩手  
 を足に加へて拜し同輩ハ互に一礼して過ぐ  
 べし吾のみ乗車ならバ上輩へハ下りて拜し  
 をなく同輩へハ車を止めて一礼すべし又凡  
 拜禮をなすにハ眼鏡手袋等を脱ぎべし  
 人と同行中留にハ先導の外ハ上輩にハ  
 同輩にても踰え先つべからぬ  
 送迎の禮  
 上輩の来る時ハ之を舌關に迎へ夫より誘引  
 して客間の外に跪き先客を座敷に入らしめ



次に亭主下座に着きて  
 特礼をべし其去る時  
 も亦誘引して去關に出で  
 特礼をして別るべし  
 同輩ならば主客共に次の  
 間に跪き互に一礼  
 先客を進めて座敷に入ら  
 ず其去る時ハ先へ  
 下座に着き互に特礼をべ  
 し其去る時ハ先へ  
 立ち去關の側に出で互に  
 一礼して別るべし  
 凡て送迎の節建具の開閉  
 ハ亭主之をなすべ  
 若下輩の来りて敷居の外  
 より拜せざる時ハ  
 片手を座に着け之を進め  
 て内に入らしめ草  
 の礼にて會釈をべし其去  
 る時ハ亦同し

扇斗を進め、儀の部  
 扇斗を三方に載せ、縁の  
 目を前に、胴の續目を  
 向に、左の相指を  
 縁へ、他の四指を狭間へ  
 掛け、上輩へハ目、中輩  
 下輩へハ通に、捧げ、中  
 下へハ、三、尺の前に、跪  
 き、膝行し



扇斗進む



て腰を居うると同時に座に置き両手にて  
 の下部を持ちて推し進め坐礼の如くして上  
 座を伺ひ後少く身を出し両手に捧げ膝行  
 て退き客に背かぬ攪旋回して起ち還るべし

火鉢進め攪

烟草盆に同じ但三脚ならば二脚を上座へ一  
 脚を下座へ向けて進むべし

烟草盆進め攪

左右の小指を底へ掛け他の四指にて持ち出  
 で膝行し火壺を客の右に置き左にて進む

むべし

果子進め攪并に攪め攪

器に盛り臺に載せ蒸果子ならば楊枝を添へ  
 持ち出で客の左に置き茶を進め次に果子  
 を吾前に置き直して進むべし此進め攪攪め  
 攪共に熨斗三方に準てべし

茶進め攪并に攪め攪

天目臺に載せ両手に捧げて進み出で跪きて  
 右の三指(中指)指(食指)にて蓋を取り菓子ハ蓋を取ら  
 進む(て)之(を)持ちながら他の二指を臺に添へ



左の拇指を臺の端へ挂  
 け呼吸を戒め膝行して  
 進め臺と蓋とを客の少  
 く右側に置き退きて客  
 の喫むるを待ち畢らば  
 又進み右の三指にて蓋  
 をなす両手に持ちて廻  
 り還るべし又平常の茶  
 托にて進む時ハ客茶  
 碗のみを執れば茶托を



茶を進むる體

持ち還るべし若茶托と共に執る時ハ其儘置  
 きて起ち還るべし

書冊進め攙并に収め様

見臺にて進むにハ書冊の紙を見入るべき處臺に  
 載せ両手の拇指を上にて小指を下に掛けて  
 枕木の処を持ち臺の上部を吾方へ少し傾け  
 捧げ出で進むべし臺を用おざる時ハ扇子  
 を開きて正しく之に載せ扇眼の方と書冊の  
 下部とを右手の拇指にて抑え他の四指を下  
 にして横に持ち左手ハ股に加へて進み出で



膝行して坐座に置き扇眼を貴人に向け  
 子の左右両端を持ちて推し進むなり之を  
 双むるにハ先曳き出して前の如く持ち還る  
 べし

扇子進め様

扇子の本を右の三指にて持ち其末を斜に右  
 へ傾け左の手を下より添へ進み出で少しく  
 左に偏りて膝行し兩臂を座に着けて貴人の  
 右手へ進むべし  
 扇子にて物品進め様

扇子を開きて晝ハ表夜  
 ハ裏を上にして右手に其  
 本を把り左手を上端へ  
 掛け書き物包物ハ上を  
 向に揚枝ハ其尖を右  
 に本を左にして少く斜  
 に中央へ置き捧げ出で  
 て進むべし  
 團扇進め様  
 繪ありて白柄ならハ繪



團扇進め様



を上にし右手にて柄を持ち左手を下より添へ右へ傾けて進め塗柄ならバ柄を向にし羽の中部を両手に持ちて進むべし

小刀進め様

柄を右の三指にて持ち刃を吾方に向し右へ傾け左手を下より添へ臂を座に着け貴人の

右手へ進むべし

文箱進め様并に収め様

文箱を右手に捧げ左手を股に加へ進み出でて跪き膝行して座に置き向を正し両手にて

推し進め起ち還りて敷居の外に坐して待つべし後又進み曳き出して前の如く持ち還るべし

料紙硯箱進め様并に収め様

料紙を箱の上にて載せ両手に持ち進み出で箱を座に置きて手を箱の向へ掛け右へ廻して向を正し料紙を向へ進め蓋を取りて之を箱の右へ置き其上に箱を重ぬ料紙と並べて其の左へ置くべし之を収むるにハ先料紙を少し曳き次に箱を曳き出して向を正し蓋をなす







袋の口を下座へ向け三脚のものハ二を上座へ一を下座に向け跪きて置くべし其数多き時ハ上座より始め漸下座へ及ばず又燵を剪るにハ燵剪を右手に燵壺を左手に持ち出で燵臺の前に跪き燵剪を燵壺の上に乗せて臺に置き火袋の口を両手にて開き先燵壺の蓋を取り次に左手に持ち燵剪を右手に把りて剪るべし剪り終らば燵剪ハ折釘に挂け燵壺ハ蓋をなして臺に置きて退くなり但時宜により共に持ち還るも妨なり

屏風扱ひ様

客の好に應じ書画を見せざる為に又風を防ぐ為に中をもち少し右に傾けて躰に着け物にて中部をもち少し右に傾けて躰に着け物に觸れざる様徐に持ち出で適當の位置に置き中央より先上座へ開き次に下座へ開くべし九画ハ樹木を上にて草花を下にし鳥ハ獸の上に画ハ書の下に立つるもの女礼ども其巧拙に因りて之に反する正あるべし

陣物扱ひ様



軸物に一幅あり又二幅  
 三幅四幅等の對あり故  
 に豫書画の順序并に御  
 景の位置等を檢し置く  
 べし之を挂くるにハ右  
 手に軸物と竿とを合せ  
 持ち箱へなすに竿を箱  
 持ち出し左手を股に當  
 るもありづ左手を股に當  
 て中坐して進み出で床  
 の三尺許前に跪き軸物



軸物を挂る體

と竿を右の膝脇に置き右手に軸  
 に移し右手にて紐を解き之を  
 みて印ある方の後へ引き寄せ  
 第一文字の処  
 まで展べて下に置き風帯の左  
 及び右を整へ右  
 手に竿左手に軸を持ちて適宜  
 に展べ床廣け  
 れハ左足より上りて折針へ挂  
 け左に幅を  
 三幅の幅を  
 立て倚せ両手に軸を持ちて展  
 べ盡すべし  
 より竿を右にして退き跪きて  
 傾斜を視正し  
 からざれば進みて之を正し起  
 ち還るべし之



を收むるにハ前の如くに竿を持ち床の前に  
 跪き起ちて床に上り竿を壁に立て倚せ跪き  
 て軸を持ち巻きながら竿を右手に取り起ち  
 て掛緒を弛し二尺許退き坐して風帯を右よ  
 り收め軸を巻き紐を結び竿と軸とを右手に  
 持ち起ち還るべし  
 小袖羽織の類着せ様  
 両手の拇指を表に食指中指を裏へ廻して襟  
 の上部の左方を持ち無名指と小指にて両袖  
 口を狭み起ちて袖口の手を離し左より着せ

て後帯を進むべし

袴着せ様

後腰を向へ垂れ前紐を左右へ分け前腰を両  
 手に持ちて進むべし

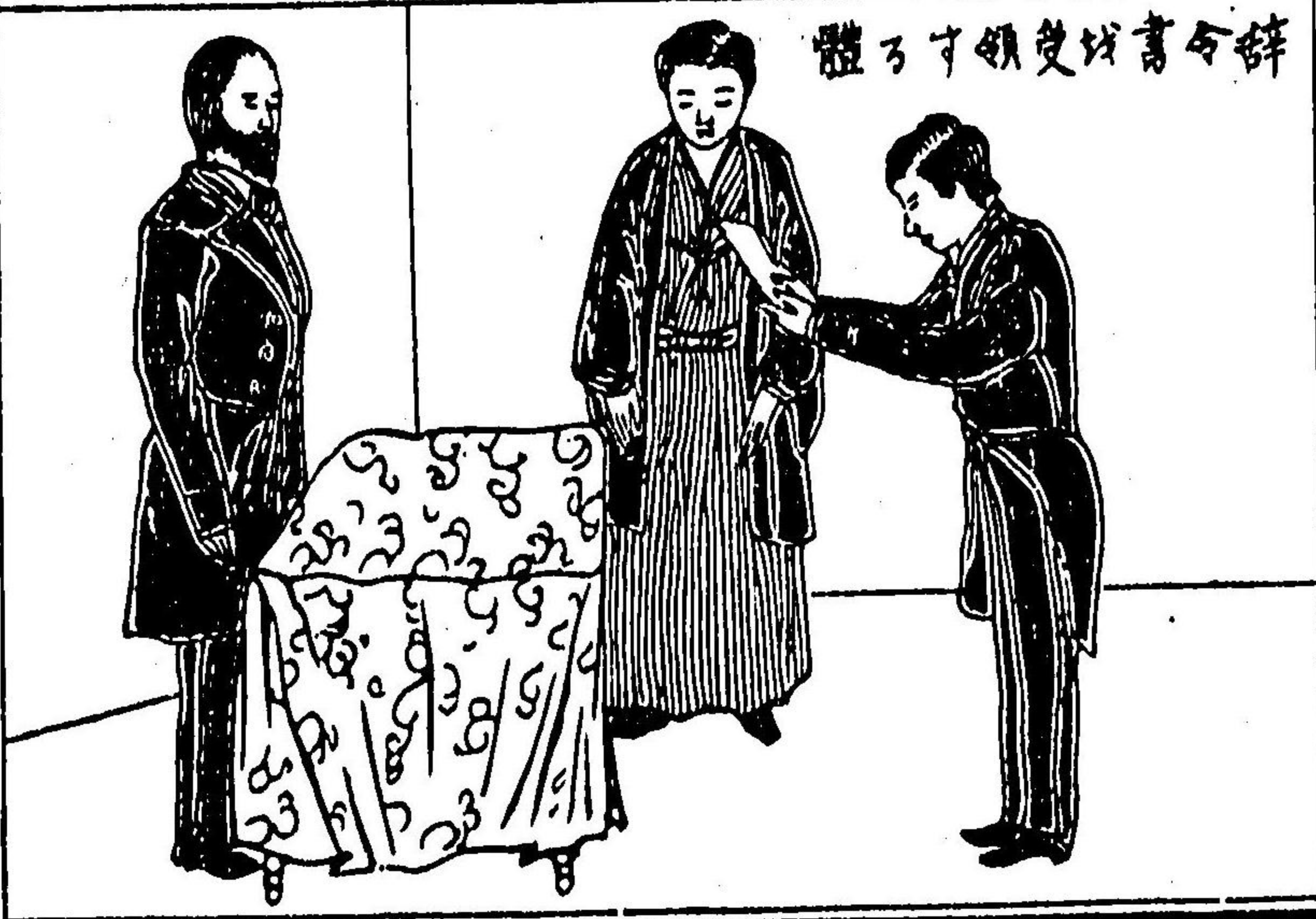
授受の部

物品を受領する様

中坐して進み出で三尺許の前に跪き膝行し  
 て坐し両手を座に着けて上座を伺ひ左を上  
 にして手掌を重ぬ両臂を座に着け少し進み  
 て受領をへし退く時ハ亦膝行し両臂を座に



着け拜戴て去るべし  
 若起立して受領する時  
 ハ次の項に準むべし  
 辭令書を受領する儀  
 侍立する人の指名する  
 に應ぐ俎子を距る三尺  
 許の前に進み兩足を揃  
 へて敬禮し再左より三  
 足半進み辭令書を左手  
 に受け右手を添へて拜



戴し左より三足半退きて  
 其右端を緊く持ち左の  
 一見見して本如く疊み  
 見しに之を下に重ぬ若  
 毎に之を懐に中重ぬ若  
 其中央を右手に持ち最  
 配饌の部に右手に敬  
 客を請成るにハ第一掃  
 應ふて之をなすべし客  
 之を待たむるも悪く其  
 直に酒饌を進むるも不  
 可なり宜しく其座に就  
 先茶果



を進め少く談話して後膳部を出さべし  
 酒饌を出さしハ飯を先に中間酒を進むる  
 を本式とせ略式にてハ先酒を進め後に飯を  
 進むるなり  
 給仕に出づるものハ身軀衣服を清潔にし  
 物を除き羽織を脱ぎ言動を戒め手容を正し  
 足を撫で癢を搔き髪を搜ぐる等の上あるべ  
 からぬ  
 吸物進め搦  
 両手の細指を膳の縁へ掛け四指を下にして

持ち三尺許の前に跪き膝行して置き両手に  
 て推し進むべし  
 杯進め搦  
 杯を三方又ハ臺に載せて左手に持ち右手に

燗鍋を持ちて進み出で膝行して燗鍋を上座  
 に杯を吾前に置き坐し両手にて臺を推し  
 進むべし酌人別にある時ハ熨斗を進むる作  
 法に準じ

酒進め搦  
 燗鍋持徳ち利左なら右を下に添ふるなりにの弦の中以



下を右手に持ち左の四指を口の下に添へ指にて蓋を抑へて酌をべし

取者進め様

膳に載せ持ち出で上座の方へ斜に置き両手に持ち吸物膳へ居る置きて膳を持ち還る

本膳進め様

両手に持ち出で客の前に跪き下座に置き両手を座に着けて膝行し両手に吸物膳を少く曳き出で斜に上座に置き本膳を吾前に

直して控へ進め吸物膳

ハ吾前に直し両手に持

ちて廻り還るべし

二の膳三の膳進め様

ハ左に居る置くべし

向詰進め様

本膳の向へ居るべし

曳菜進め様

二の膳の向へ居るべし



膳進部



飯の再進

給仕二人ならバ甲ハ飯鉢を臺に載せ敷居の外に持ち出で、着座をべし乙ハ盆を持ちて甲の右側に跪き、丈より膳の前に進み跪き出で、膝行して坐し、盆にて飯碗を受け、甲ハ兩手にて鉢の蓋を取り、之を其左側に倚せ、掛け碗を兩手にて取り、左の拇指と食指にて糸鋪を、右の四指を添へて、鉢の縁へ少し掛け、右の拇指を上、他に四指を下にして、甲ハ兩手にて、鉢の蓋を取り、之を其左側に倚せ、掛け碗を

を取り、杓半許盛りて、杓子を鉢の中に置き、碗を乙へ授けて、蓋をなすべし、乙ハ之を受け、持ち出で、進むるなり

汁の再進

盆を持ちて進み出で、坐して、碗を受け、替り持ち出で、引いて退き、汁を盛り、蓋を出さる、自取をなす、持ち出で、坐し、盆を左手に

湯進め攪

き、兩手にて進むべし



右手にて湯桶の把手を持ち左手を嘴の下に添へて進むべし

膳部撒し様

先曳菜を引き次に向詰次に三の膳次に二の膳を引き最後に本膳に及ぬ本膳ハ果子の膳を持ち出で之と引き替ふるを本膳と吸物膳を引き替ふる作法に同じ

抹茶進め攪并に收め様

幅紗を四折にして茶碗を載せ幅紗の角を左右にして其下へ両手を掛け持ち出で進む

べし之を收むるにハ両臂を座に着けて取り前の如く持ち還るへし

飲食の部

人の招待に應じて行く時ハ早遅共に宜く加らぬ時刻到らば事を抛ちて行くべし座に就きてハ挨拶残る所なきを要す調理の塩梅等譽め過ぐるも悪く無心に食するも亦不可なり要するに亭主の注意の列礼る所のものハ客も亦注意して至當の挨拶なかるべからぬ



菓子喫い様

懷中ヨリ紙を出して右の膝の脇に置き菓子  
 を取りて其上に載せ其割り得べきものハ左  
 右の指先にて二に割り左の半片を紙の上  
 置き先右に持てる半片より食せべし  
 茶喫い様  
 先茶碗を両手にて取り一應下に置き再取り  
 上げ喫い畢りて臺に置き茶托の時ハ之を托  
 の上に覆せ置くべし  
 膳受け様

膳を居うる人上輩なら  
 ハ両手を座に着けて禮  
 同輩ならハ膝に加へ  
 て禮せべし給仕ならバ  
 別に禮せざるに及バズ  
 酒受け様

盃ならバ先其繪様を見  
 て向を直し両手にて取  
 り若常の楮口ならバ右  
 手にて取り左へ移し右





を下より添へ共に下座へ挨拶して後酒を受

くべし

箸の取り構

右の三指中指 薬指 小指にて箸の中央より七八分許

の本中指 薬指 小指にて箸を持つべし箸を休むる

時ハ本を正しく揃へて舊位に復し置くべし

吸物吸ひ構

右手にて吸物の蓋を取り右脇へ仰向に置き

箸を取り椀を両手にて上げ左に持ち先実を

食に次に汁を吸ふべし

膳部食ひ構

先飯椀の蓋を左手にて取り之を左の脇へ置

き次に汁椀の蓋を右手にて取り之を右の脇

へ置き其壺あるものハ飯椀の如く其右

に在るものハ左右に在るものハ右にて蓋を

取り飯椀を両手にて取り上げ左に持ち箸の

尖を汁に濡して二箸食し汁椀を両手にて取

り左へ移し實を食し汁を吸ひ漸飯汁飯鱈又

飯汁飯壺や一回食して後二の膳に移り汁よ

り菜を食し次に三の膳に移り亦汁を先にし



後本膳に歸るべし其汁一菜其間必飯を食  
 汁より菜或ハ菜より菜に移るべからず又  
 鱈の外ハ器と共に手に取り上げて食ふ二の  
 膳三の膳の菜ハ右より始め鱈ハ左の山より  
 食せべく九喫食に慎むべきと多し今其尤  
 忌むべきとを左に掲ぐ

移り箸  
 もぎぐひ

焼物を食ふ直に煮物に移るを忌  
 箸に附きたる飯粒を口に取る

舐り箸

を去ふ  
 箸を深く舐るを去ふ

こみ箸  
 こち箸

口中へ箸にて押し込むを去ふ  
 煮物汁の實の類底にあるものを

探り箸

こち起して食せし事なり  
 猶何を有るやと探り見るなり

空箸

食せんとし箸を着け食せず

受け吸

汁の再進を給仕より受けて膳に  
 置かぎ直に吸ふを去ふ

膳越

膳の向に在る物を其儘箸にて直  
 に食せざるを去ふ



又盛 飯を箸にて椀の中へ押し固むる

犬喰 箸を云ふ 挨拶もせし俯して餘念なく食す

箸なま 箸を云ふ 箸をや食せんと和物をや食せんと

まじ箸 箸を云ふ 猶豫を云ふ 香の物にて湯茶の中を廻すを云ふ

鷓呑 箸を云ふ 咀嚼せむくて直に嚥下さるを云ふ

猿喰 箸を云ふ 多く嘔みて頬の膨るを云ふ

飾繪 箸を云ふ 飾りたる繪を箸にて茶を云ふ

抹茶受け搦

茶碗を両手にて受け左の掌へ居る右の拇指を前にし他の四指を向にして茶碗に添へ少く捧げて戴き下に置きて菓子を食べ前如くに持ち上げ少く揺かして三口半に喫すべし



抹茶飲



附録

圓き物食まわりのものにくわ攪かきまぜ

餅蒲鋒及輪切もちかきやぶらぎの果等くだもの総て圓き物まわりのものハ二口三口

小口に食こぐちして新月形しんげつがたをなさぶる攪かきまぜにくわまべ

饅頭食まんどうに攪かきまぜ

箸はしにて取り左ひだりの掌たなごころに載せ其中央そのちゆうちゆうを箸はしにて

箸はしを下したに置き二割ふたわりに右みぎに在あるを下したに置お

き左ひだりに在あるを右みぎに移うつして食くまべ

蜜柑食みかんに攪かきまぜ

小刀こがたなを添そへ出いづる時ときハ花落はなからの方ほうより十文字じゅうもんじ



に薄く切目を入れて剥ぎ掛けて小刀を置き皮を剥ぎて食へべし

桃の食う攪

花落より皮を剥ぎ二割に核を去りて食う皮と核ハ鼻紙に包み袂に入るべし

柳剥ぎ攪

花落より皮を剥ぎ二に割り心を去り二三の切目を入れて出さべし

梨剥ぎ攪

花落より皮を剥ぎ輪切にして出さべし

軸物見攪

床の前一疊を隔てて坐し両手(取り子を)を座に着け巻軸より漸逆に見上ぐるなり二幅ならバ左より三幅ならバ先中を見次に左後に右を見らるべし

活花見攪

床の前一疊を隔てて坐し立花を扇を以て活花を見攪置くと両手を座に着け先水際を見次に幹莖と漸見上ぐるなり三瓶あらバ中を先に次は左を見後に右を見らるべし



庭の見攬

縁先に両手を突きて坐

又ハ露地口より入ら

バ手控の石へ手を掛け

躰居て掃除の行届よ

り樹木の手に等を眺む

飾附見攬

先軸物を見次に香爐次

に花次に違棚に在る料

に



庭の眺むる體

紙箱硯箱書籍香合及羽帚等次に屏風次に盆  
織を見最後に庭前を見畢りて相當の挨拶あ  
るべし

鼻をかむ心得

吐鞆の前にてハ次の間へ立ちてかみ若立ち

難き時ハ下座へ向ひてかむべし総て鼻をか

むにハ低く短く高鼻をかむべからず又

人伸噴嚏等を慎むべし

扇子の遣ひ攬

扇子ハ上輩の前にてハ使用せぬを宜くとす

ハ豊義



若盛暑等時宜により使  
用する時ハ少く開き徐

に扇ぐべし

煙草を吸ふ時の心得

煙草ハ上輩の前にてハ

吸ハぬを宜くと若時

宜により吸ふとあらバ

先挨拶をべし其灰を

棄つる時直に唾壺を敲

くべからず宜しく掌に



扇子使  
ふ體

受けて敲くべし

詞遣の心得

言語ハ高からず又緩ならず急なら

む明瞭にして諛からざる様になべし卑賤

の流行詞等ハ尤慎むべきとなり又人の談話

の終らざるに自慢言をべからず

辞退の心得

辞退ハ恭敬を表するものなりども度に過ぐ

れハ却て失礼となるものなり例之ハ吾に過ぐ

應せる座を與へらるるを頻に辞退して人を相



八巻 禮儀  
煩<sup>わづらひ</sup>し或<sup>ある</sup>ハ饗<sup>けい</sup>應<sup>おう</sup>に出<sup>い</sup>でたる物を惡<sup>わる</sup>遠<sup>とほ</sup>慮<sup>し</sup>て少<sup>すく</sup>  
くも食<sup>た</sup>せど亭<sup>てい</sup>主<sup>しゆ</sup>の配<sup>はい</sup>意<sup>い</sup>を無<sup>む</sup>にせざる等<sup>らう</sup>の事<sup>こと</sup>ハ  
不<sup>ふ</sup>敬<sup>けい</sup>も亦<sup>また</sup>少<sup>すく</sup>なからざるを以<sup>もつ</sup>て宜<sup>よろ</sup>しく其<sup>その</sup>程<sup>ほど</sup>度<sup>ど</sup>  
を守<sup>まも</sup>るべし

明治十六年九月十三日版權免許  
同 十七年三月出版

廣島師範學校編纂



出版人 松村善助

廣島區横町  
拾四番邸



